

更級への旅

53

なぜ初代村長は「更級」に生涯を捧げたのか

更級村初代村長の塚田小右衛門（雅丈）さんは、なぜ生涯を「更級」に捧げたのか。それだけ価値のある言葉であったことは、これまでのシリーズで

明らかだと思っておりますが、そんな疑問がずっとありました。そのなぞに迫るヒントとなる文献がありました。千曲市羽尾地区（旧更級村）郷土史研究家の塚田哲男さんからお借りしたものです。

▽相次ぐ身内の不幸

小右衛門さんが自身が書き残した「略歴及略伝私公用実行録」です。タイトルも自分でつけたもので、冒頭に主に公職に関する自分の略歴を簡条書きに記しています。末尾に「大正五年」と書き、自分の印を押していることから、小右衛門さんが六十八歳のときにまとめたものです。

略歴に続いては日記風に自分のやってきたことを綴っています。それらを読むと、小右衛門さんは更級村の初代村長となる前の二十代までに本当に苦勞したようです。七歳で母親と死別し、祖母の手で育てられました。十三歳で父親が死去し、十四歳のときは頼みにしていた兄小二郎さんが病死しました。二十五歳で羽尾村の名主に就任します。名主とは村の責任者です。自治体の機能を持つ前の村ですが、今で言えば区長さんの仕事にさらに行政がらみの仕事も勤めるという責任が重く多忙な立場です。

村用として神社や寺の敷地などを調べる仕事が無い込むのですが、更級郡内の近辺を歩きます。その際、大雨に見舞われ、千曲川の洪水の中にもかかわらず、船で川を渡ることもありました。小右衛門さんは

「その当時はさほどとも思わざりしが、六十（歳）以上の今日、右様の始末なれば、果たして一命にかかわるものと想像せられたる」と記し、当時はそれが当然だったので別に苦勞とは思わなかったと回顧しています。

明治七年（一八七四）、三歳の三男と

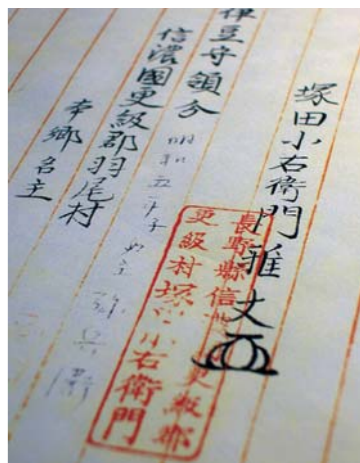
四歳の長女を天然痘などの病気で亡くしました。小右衛門さんが二十七歳のときです。そのときの思いについて「嗚呼子を持つ親やられし。文明の今日ならば医師治療を以て必ず生存し社会何業成居ならん」と悔やんでいます。我が子を失うつらさは今も昔も同じです。

▽天然痘の恐怖

このような観点で読み解こうと思っただのは、「略伝」の冒頭にある次の記述を見てからです。小右衛門さんは四歳のとき、天然痘にかかりました。そのときに治ったことを「九死に一生を得る」とした上で、「以後、我人間社会の不界ものとなれり」と記しているのです。不界者というのはすごい言葉です。人間でも妖怪でもない、どちらにも属しない。中途半端な状態ですが、小右衛門さんには一度死んだも同然なのだから、「死んだ気になって……」という思いがあったと思われれます。

当時、天然痘は大変な病気でし。高熱で始まり、発疹が現れ、発疹は口の中、のど、顔、手足の皮膚など、ときには全身に及びます。発疹はうみかさぶたになるのですが、この間に衰弱し、死亡率も高く、治っても発疹の後が残ります。人類を大昔から苦しめてきた病気なのですが、一九七七年、世界保健機関（WHO）は天然痘の絶滅を宣言しました。患者を見つけたら、周辺の人たちにもれなくワクチンを接種するという対策の成果でした。

しかし、小右衛門さんがかかった当時は、日本でワクチンがようやく広ま



り始めたころだったので、ワクチンはまだ容易には使えなかったと思われる。三男の直二郎君が亡くなってしまったように一度掛ければ死を覚悟しなければいけない病気でし。

今、新型インフルエンザという新しいタイプのインフルエンザの発生が恐れられていますが、このインフルエンザにはワクチンがないので、日本でも最大六十四万人が死亡すると予測されています。小右衛門さんの時代は、まさしくこのワクチンがない時代でしたので、天然痘に対する恐怖はこれに



匹敵するものだったと思われれます。

▽先見の明

死んだ気になればなんでもできる、何も怖くない、とよく言われます。小右衛門さんが私財も投じながらその気持ちをつけたのが、更級村の宣伝と地域振興だったと考えられます。

明治十一年（一八七八）、小右衛門さんが三十歳のときには古峠付近に隧道をうがったプロジェクトに取り掛かります。南側の坂井村に直結するトンネルをあけることよって暮らしを豊かにする狙いがありました。トラブルが

「人間社会の不界者」という自覚



塚田小右衛門さん
(ご子孫の塚田せつ子さん蔵)

あり、この計画自体は頓挫しましたが、後年の明治三十二年（一八九九）には、北信と中南信を鉄道でつなぐ大動脈国鉄中央線の冠着トンネルとして実現しました。小右衛門さんには先見の明がありました。

現在の国学院大学の前身となる教育機関の先生だった佐藤寛に依頼して「姨捨山考」を出版しました。一千部を印刷し、全国に配布しました。「古来、姨捨山とされてきたのは冠着山のことである」ことを証明する本でした。掛かった費用数百円を自費でまかさないました。

シリーズ五十二回で紹介したように、旧更級村羽尾地区の郷嶺山の山頂には観月殿を建設しました。「略歴及略伝私公用実行録」には、小右衛門さんが成した仕事のほかにもいくつも記されています。

▽大往生

小右衛門さんの人柄をうかがわせるエピソードもありました。

冠着トンネルの開通を記念して郷嶺山に碑を建てることになりました。そのとき碑文に小右衛門さんの功績に触れる部分があったのですが、小右衛門さんはそれを辞退しました。そうこうしているうちにうまむやになりにかかったとき、この際、「姨捨山の碑」を建立しようということになりました。

雅丈さんが周りの人たちの気持ちを受けられてできなかったものが今も郷嶺山に残っています。「姨捨山之碑」とありますが、内容は小右衛門さんの功績を要約したいわば謝恩碑です。大正六年の建立です。（中央の写真）

小右衛門さんはこの六年後の大正十一年（一九二二）に亡くなります。そのときの様子をお孫さんにあたる塚田浅江さん（二〇〇〇年、九十歳で逝去）が語っています。竹内長生さんがお書きになった「とぐら郷土の人物伝」の中で紹介されているもので、小右衛門さんはお昼を食べた後、奥さん（浅江さんにとっては祖母）にシーツのしわまで伸ばしてもらった布団に仰向けになり、大あくびをして大往生をとげたそうです。浅江さんは「病みもせず苦しみもせず閉じた生涯。自分の理想のままに生き最高ではなかったと信じている」と言っています。次に掲げるのは小右衛門さんの辞世の歌です。

いにしへの文みてぞ知る姨捨は
そそり立たせる更級の山

小右衛門さんについてさらに詳しくは連載の十三、十四、三十、五十一、五十二の各回をご覧ください。

発行 二〇〇七年 四月十五日

編集 さらしな堂

（代表・大谷善邦）

〒三八九・〇八二三

長野県千曲市大字若宮一八四・六
(旧更級郡更級村)